

父母もその父母も わが身なり



え・たむらかずみ

九月のテーマ

なぜ墓参か

自分のことを心から思ってくれる親の存在ほど、ありがたいものではありません。

たいものではありません。

〈子供の頃、どれだけ自分を可愛がってくれただろう〉〈病気の時、寝ずに看病してくれた〉〈苦勞して働いて、学校を出してくれた〉

たとえ親が亡くなっていたとしても、こうしたことを思うたびに、心が温かくなるものです。

では、親に直接的な愛情をかけたもらえなかった人は、どうでしょう。世の中には、親の愛情を感じられない人もたくさんいます。叱られたり、粗末に扱われたことしか思い出せない人もいます。そうした人は、親を恨み、憎んで当たり前なのでしょうか。

いや、決してそうではありません。親に対する感謝は、生命付与の一事に尽きるのです。

わが生命は、父母によってこの世に生み出されました。親がいなかったら今の自分はいません。このことへの感謝は無条件です。

生命付与という点では、父母もまた、祖父母に生命を享けていま

す。祖先がいなければ、両親も、今の自分も、子供も、孫たちの存在もありません。

「父母（ちちはは）も その父母も 我身（わがみ）なり われを愛せよ 我を敬（けい）せよ」

これは二宮尊徳翁の道歌です。父母、その父母と連綿と命が続いてきたからこそ自分の命がある。

体の中に、親祖先の尊い命があることを思えば、自分を愛し、自分を敬うような生き方をしなければならぬということですね。同時に、わが生命のもとである親祖先を大事にすることが、自分自身を大切にすることでもあるのです。

亡き人の墓参は、死者を大切にすることという心のあらわれです。祖先の墓を大事にし、供養していくことは、祖先を喜ばせることになりません。ひいては自分の生命を大切にすることにほかなりません。

若い頃、さんざん親不孝をしてきたというAさんは、墓参を月一回、コツコツと三十年間続けてきました。お墓を大切にすることは、自分自身を大切にすることである

と気づいたからです。

Aさんはまず、お墓周辺をきれいに清掃してから、親祖先に近況を報告し、今あることの幸せに感謝して、お礼を述べています。時には自身の若い頃の過ちや親を悲しませてきたことを反省し、墓前で詫言することもあります。

忙しいAさんにとって、この墓参の時間は、親祖先と向き合い、自分と向き合う貴重な時間であるといえます。「だから墓参は自分のためでもあるのです」と語るAさん。月に一度、その時々を決意を親祖先の御霊に誓い、気持ちを引き締めることが、なくてはならない習慣となっているのです。

自分の生命の元である親に純情な心で対座する時、その生命はいよいよ純化して、思いがけない力が湧いてきます。

Aさんの場合は月に一度ですが、人それぞれに事情は違うでしょう。毎日、週一、月一、年一と自分なりに決めて定期的にお墓に参ることとで、自己の生命力を更に輝かせたいものです。